

市長インタビュー

船橋市長 松戸 徹

聞き手 高橋 秀雄 千葉県地方自治研究センター 副理事長
椎名 衛 千葉県地方自治研究センター 副理事長
佐藤 晴邦 千葉県地方自治研究センター 事務局長



船橋市長
まつど とおる
松戸 徹

1954（昭和29）年生まれ。
東京理科大学理学部物理
学科卒業後、船橋市役所
入所。市長公室長、副市
長を歴任。2013（平成25）
年7月に船橋市長に当選、
現在2期目。

（高橋） 本日はお忙しいところ時間をさいてく
ださり、ありがとうございます。私は船橋出身で
海神小学校、海神中学校に通っていました。その
後、長く離れていましたので、懐かしくなって先
日、船橋のまち歩きをしました。まちが大きく
変わっていておどろきました。

（市長） そうですね。特に、海神中学校の近辺
ですと、旭硝子船橋工場が平成16年に閉鎖されて、
その跡地周辺は大きく変わりました。市と野村不
動産が協議しながら、工場跡地周辺に「森のシ
ティ」という新しいまちをつくり、フランス政府
からも表彰されました。フランス政府が「エコカ
ルティエ認証」といいまして、“環境プラス自治”
を中心に「新しいコンセプトのまちをつくろう」
という観点から、世界中でいろんなまちを探して
いて、日本のフランス大使館からも推薦をいた
だいて受賞しました。1年以上の審査の結果、住民
参加型のまちづくりとコミュニティ重視の精神が
高く評価され、「ふなばし森のシティ」がいただ
くことになりました。

■東京から20km圏内にあって鉄道網が発達

（高橋） それでは、幾つか質問を用意いたしま
したので、市長のお話を伺いたと思います。市
長は、船橋市職員の出身でもあり、市長在任も2
期目に入り、長く地方行政にかかわってこられま
した。“船橋市の良さ”のアピールと、船橋市の
抱える主な市政課題について、簡単にお話した
だけかもしれません。

（市長） 私も市の職員として、ずっと船橋のま
ちの移り変わりを見てきました。今年、船橋市は、

市制施行80周年です。その約半分の期間を職員、
そして副市長・市長として行政にかかわることが
できました。

船橋市は、都市としての一番のアピールポイン
トは、東京から20km圏内にあって、鉄道網では9
路線・35駅あり、非常に便利で住みやすい街だ
ということです。そしてまた、東京から20kmとい
う距離感が、市の産業を含めて非常に大きなアド
バンテージになっているということは確かだと思っ
ています。

特に船橋市にとっては昭和12年の市制施行から、
戦前・戦中・戦後といろんな時代がありましたが、
昭和35年に、前原団地という市内の大型団地がで
きて以降、次々と新しい団地ができました。毎年
2万人前後の人が移り住んでくる状況が20年くら
い続いた、典型的な人口急増都市でした。

“船橋市の良さ”というのは、そのような利便
性を背景にして、全国からいろんな人が集まって
きています。その人たちが定着をしてきているこ
とに加えて、もともと持っていた歴史のある、非
常に古くからの顔と、新しい顔がミックスされて、
それがちょうどいい形で安定をしてきています。
そのことによって、「市民力」が非常に強いまち
だと私は感じています。

■都市農業と漁業が盛ん

そのような都市像のほかに、産業面からみま
すと、東京から非常に近いところにもかかわらず、
船橋市の都市農業が特筆されると思っています。
特に、初めて特許庁の地域団体商業登録を、ニン

ジンで取りました。それから、梨でも取りました。また、独自に小松菜とか枝豆を市の推奨ブランドとしています。船橋の農産物は非常に品質が良く、今年も千葉県で農林水産大臣賞を取ったのは、船橋市の梨でした。

漁業も非常に盛んで、海の幸もたくさんとれます。海苔も、「本場の本物」という、農林水産省の外郭団体が認めた唯一の海苔は、船橋の海苔です。スズキの水揚げが日本一ですし、ホンビノス貝も有名になっています。ホンビノス貝はボストンのほうでクラムチャウダーに使っている貝ですが、外国船のバラスト水の中に入っていたと思われれます。それが今、非常に多く生息しています。あざりとけんかしないため、漁師の皆さんもおおらかに見ていたら、繁殖しました。味もよく、今それも船橋市の推奨産品になっています。また、船橋では、農業、漁業の若い後継者が非常に多いんですよ。

(高橋) 後継者不足で悩んでいる農業や漁業の地域の話も聞きますが、船橋は恵まれていますね。

(市長) これは特筆されるべきことです。農家の子どもが大学を出て、それなりの期間会社務めを行った後に、親が、「もうそろそろ、農業をやってみないか？」と話したときに、彼らは昔と違って非常に経営者としての感覚を持ちながら農業に入ってきます。

農業と水産業も盛んであるということで、食の部分でまちの魅力をつくってくれています。どんどん自慢話が増えてしまいますけれど…。



インタビューに答える松戸徹市長

(高橋) どんどんお話しください。

(市長) 音楽の分野でも、全国レベルの賞をもらっている学校が本当に多いです。船橋の音楽というのは、社会人もそうですが、子どもたちのところに日本一を経験した人が大人になって、今は学校の先生として、指導者として戻ってきています。だから、非常にいい循環ができています。

まちづくりの面で、「経済ミーティング」といって、異業種の若手の人たちの交流の場を、私が市長になってからずっと開催してきました。彼らが新しいまちづくりを、率先して行ってくれるようになってきています。葛飾中学校の卒業生で森沢明夫さんという小説家がいまして、高倉健さんの『あなたへ』という最後の作品とか、吉永小百合さんの『不思議な岬の喫茶店』の原作者です。今年は特に市制施行80周年ということもありますが、森沢さんに船橋をテーマにして小説を書いてほしいとお願いしましたら、それを若手の人たちが、「映画におこそう」ということになり、いま進めていただいています。

「ミュージックストリート」という音楽のイベントを行っています。これは「1,000人の音楽祭」というのが元になっていまして、先ほどお話しした学校の生徒たちと社会人の人たちが一緒に演奏しますが、演奏者だけで2,000人を超えます。それにプラスして「ミュージックストリート」という、ジャンルを超えて、アウトドアでみんなに聞いてもらおうというイベントです。音楽をやっている人たちのほかに、商店街の若者とか工業関係の人たちが加わって、「新しい形のものをやろうよ」ということで、本当にエネルギッシュな状況になってきています。

私としては、“船橋市の良さ”というのは、古くからのものもたくさんあるし、非常に新しい面も持っています。日本の都市の縮図みたいなまちだと思いますし、私はよく「宝島みたいなまちだよ」と話します。知れば知るほどおもしろいことがたくさんあります。船橋にはプロスポーツの千葉ジェッツ（バスケットボール）とかクボタ・スピアーズ（ラグビー）とかありますが、そういった人たちもまちづくりに参加してもらっています。

■南北問題も課題に

今後の課題は、やはり何と言っても高齢化です。船橋市の人口は63万人を平成29年4月に超え、政令指定都市を除けば全国で一番大きな市になりました。若い世代の人たちがどんどん移り住んできていますので、高齢化率はまだ24%弱ですが、高齢者の総数が非常に多くなってきています。65歳以上の方が15万人を超えてきていますし、75歳以上の方は6万人を超えています。これで団塊の世代の人たちが75歳以上になる2025年には、9万3,000人を超えます。今後、どのように高齢者の皆さんに元気に過ごしていただくか、そしてまた、介護が必要になった際にどのようなサポートができるかということについて、しっかりと対応していく必要があります。

船橋市には“南北問題”というのがありまして、市の南部地区は人口が増えています、北部地区は人口が逆に減り始めています。今までの市民サービスというのは、一様に同じものを提供していましたが、これからは高齢化の進んでいるエリアと比較的若いエリアでは、サービスの提供の仕方を変えていかざるを得ないと思います。そのあたりをどのようにうまく進めていくかということが課題としてあります。

(高橋) 概略をお話いただきましてありがとうございます。もうすべてわかったような気がしますが、さらに具体的に伺います。

先ほども南北問題という話がありました。私のイメージからしますと、船橋は寺町や海側の漁師町等の南部の古い町と、北部の新しくできたまちがあります。今、その融合の話が出ていたけれども、まちづくりとして、道路の問題があると思います。船橋というと駅前の渋滞が激しいというイメージがあります。北部と南部をどのように繋げていくかという課題について、話をお聞かせください。

■道路渋滞問題に取り組む

(市長) そうですね。船橋は、先ほどお話しした

ように人口が急増しましたので、学校建設に追われて、都市基盤整備に本格的に着手できない状況が続いてしまいました。それから、幸せなことです、戦災を免れましたので、昔の牛車が行っていたような道路を整備できないまま、住宅が次々と建てられていったという状況があります。

道路問題は、市民アンケートでも、船橋にとって長い間最も解決してほしいテーマになっています。J R船橋駅前、平成29年の夏に新しい都市計画道路が旧本町通りと駅前につながりました。そのような所を鋭意買収していきますが、用地買収が非常にむずかしいのです。なかなか便利なところですので、そこに住んでいる方の多くは「立ち退くのだったら、近くに代替地を用意してほしい」という要望が多く、なかなか進みません。

船橋の動脈というのは、どちらかといいますと国道と県道です。国道14号線と、J R船橋駅から北に向かっていく県道の夏見小室線がそうですが、この整備を国や県にもお願いしています。さらに船橋の人口密度と、経済活動の流れからいいますと、市独自の都市計画道路や生活道路を見直すこととあわせて、その連携をもっと進めていかなければいけないということがあります。

北部地区の道路整備を進めていますが、道路というのはやはり時間がかかります。しかし、将来に向けての基本的な設計図面はでき上がっていますので、それを一步一步着実に前進させていくことが重要です。懸念されるのは交通不便地域の問題です。



市政課題を質問する高橋副理事長(右)と椎名副理事長(左)

船橋はコンパクトながら駅も多いので、ほかの市と比べますと自宅から最寄り駅まで遠くないのですが、生活感覚としては遠いと感じてしまいます。高齢者の方も多くなってきていますので、独自の対策として高齢者支援協力バス事業というのを始めています。教習所のバスを借りて、一緒に乗せてもらうというのですが、今後も高齢者の移動手段を拡充していかなくてはなりません。

(椎名) 交通の便からいいますと、船橋には人が集まる要素がたくさんあると思います。休日になりますと「中山競馬場」、「ららぽーと」、「アンデルセン公園」など、人が集まる拠点がたくさんありますから、地元の人だけでなく、他市からも人がたくさん集まります。

その要因として、鉄道網が市域のほとんどをカバーできていることが大きいと思います。小さいコンパクトな公共交通の利便性を核としたまちづくりができるところが他市と比べた際の船橋市の特異な優位性だと思います。

■鉄道網が発達して雇用を生みやすい

(市長) 確かに船橋駅は、J Rの乗降客数は千葉県で一番多いのです。2番目に多いのは同じ船橋市の西船橋駅です。乗降客数で比べますと、ちょうど吉祥寺駅と五反田駅の間です。それほど人が集まってきています。

外環道が平成30年3月に市川～小岩でつながって、圏央道の茨城区間も全線開通します。船橋の持っているポテンシャルというのは、鉄道網プラス道路網のつながりがよくなってきていることによって、新しい流通の拠点としての魅力も出てきています。

船橋のもう一つのアドバンテージは、鉄道網が発達していますので、企業にとって雇用がしやすいということです。東京の企業の方とお話をしても、そのように言っています。市外から働きに来た人のためのインフラ整備は時間をかけて進めていかなくてはなりません。

環境といった面から考えると、市内の35駅からどのように公共交通の足を延ばしていくのかとい

う点については、当然採算性がありますのでむずかしいのですが、様々な可能性を模索していく必要がありますし、そういう時期にきていると思っています。

(高橋) 関連しますが、震災にあわなくて狭い道路のところに民家が建ったというお話がありました。密集した木造の家屋も大分多いと思いますので、防災対策という観点では、どのように考えていますか？

■防災対策にも取り組む

(市長) J R船橋駅南側の旧市街地は、国の「地震時等に著しく危険な密集市街地」には指定されていませんが、私ども行政の立場から見ますと、非常に危険度が高いエリアがたくさんあります。今、防災担当の部署と企画部等にいろいろ指示を出しています。船橋独自の木造密集地域を抽出して、それに対する改善計画を検討しています。

防災対策として、一気に今建っている家を移転して、緩衝地帯をつくるというのは非常にむずかしいですが、例えば「スタンドパイプ」という消火栓を使った消火設備を設置するなどして、市民の皆さんがいざというとき対応できるように先を見越して考えておく必要があります。また、緩衝地帯になるような道路を整備するということも今後検討していきたいと思っています。

■海の特徴をどう生かすか

(高橋) 船橋というのは子どもの頃、海水浴に行った記憶があるように三番瀬とか、非常に海に特徴があります。先ほど、ホンビノス貝やスズキの話もされていましたが、「海を中心にした街づくり」について、どう考えていますか。

(市長) この点については今、市としてはかなりアピールを行っているつもりでいます。例えばテレビ番組等で、船橋の海産物などもかなり取り上げられていただいています。ただ、市民の中にも「まだ海を見たことがない」という人も、実際問題としています。船橋駅を降りて、海を感じる

ものがなかなかないということがあります。

平成29年の夏に、「環境学習館」という施設を新たに三番瀬の海浜公園のところに作りました。子どもたちに船橋の海を経験して育ってもらいたいということから、必ず学校の校外学習の際に見学してもらうようにしています。特に目の前は潮干狩り場で、砂浜がずっと広がっていますので、環境学習館ではどちらかといいますとデジタル中心でわかりやすく楽しみ、あとは砂浜でフィールドワークを体験してもらっています。

海は三番瀬だけではなくて、「ららぽーと」の先の食品コンビナートからずっと続いています。「ららぽーと」の先には、南極観測船の「しらせ」が停泊していて、そこでイベントも行っています。

今、市で考えているのは、船橋駅から三番瀬の海浜公園、その東側の「ららぽーと」、食品コンビナートのあたりまでの回遊性をつくることです。そのために、例えば「ららぽーと」から三番瀬の海浜公園まで、土日限定でもいいから、ちょっと足となる遊覧船を出すことができないか、等の検討を進めています。

船橋市民の中で、海があるのを知っている人が増えています。ホンビノス貝等が浸透してきましたので、漁業協同組合も一生懸命になっています。北部地区のイベントに漁協の車を繰り出して、そこで“浜焼き”のようなことを積極的に行っていますので、かなりリクエストがくるようになりました。市民の皆さんにも少しずつ広がってきたと思います。



「ふなばし三番瀬海浜公園プール」跡地に建てられた環境学習館

東京を含めた、船橋以外の人たちも楽しめるような回遊性、駅から行けるルートづくりを今、プランニングをしているところです。

(高橋) 私たちが子どものころに過ごした船橋のイメージは、海のイメージですからね。

(市長) 昔は、国道14号線が海岸線でした。ですから、この市役所本庁舎がある場所は海でした。近くに割烹旅館や遊園地にぎわった「三田浜楽園」がありました。戦後しばらくして50万坪の海岸の埋め立てを行い、今の海岸線ができました。高橋さんが住んでいた海神あたりの人ですと、昔は海によく遊びに行っただしょうね。

(高橋) それと「アサリ」ですよ。船橋では「フウカシ」と言うのですか？

(市長) 漁師の人たちはアサリのみそ汁を「フウカシ」と言います。昭和40年代、50年代の初頭までは、駅前にハマグリのみき身を売っているおばさんがいました。

海は船橋の“財産”です。船橋には、海、商業地、工業用地、農地、住宅地もあります。これらのエリアがポツポツ点在しているのではなくて、グラデーションのように海から北側に向かって市域が変わっているところなのです。多分、海は、船橋にとっては大きなアドバンテージになっていると思います。

■中核市としての充実が課題

(高橋) 次の課題についてお聞きします。船橋は中核市になりましたが、中核市というのは、政令市と一般市の間の中間的な位置にあるのかなという印象です。中核市になって、そのメリットや課題などについて、教えてください。

(市長) 平成15年4月1日の中核市移行に伴い、福祉施設の設立認可・監督や保健所が行う保健衛生事務など、約2,500項目の事務が移譲されました。市民の皆さんにとって、例えば障害者手帳の発行が県ではなくて市役所でできますので、発行まで2カ月かかっていたものが1か月ぐらいに短縮できるようになりました。一般の市民の皆さんにメリットはそれなりにありますが、わかりにく

いと思います。

私がこれまでかかわってきた中で一番よかったと感じているのは、平成21年に新型インフルエンザが発生したときのことです。それは市内の中学校が発生元でした。今までですと、県の保健所が取り仕切っていましたが、その時は市の保健所が直接対応できましたので、国のほうともダイレクトに話し合って、「感染防止地域」の指定についても非常にスムーズにできました。国立感染症の機関ともダイレクトにやり取りできましたので、非常にフレキシブルに対応できました。やはり決定権とか判断できる権限を自分のところで持てるというのは、非常に大きなことだと思います。

中核市も50近く全国にありまして、都市型の中核市と過疎化が進んでいる中核市では課題が全然違います。行政が市民の幸福を追求するという点では一緒なのですが、取り組まなければいけないところが微妙に違いますので、中核市としての取り組みは非常に難しい面もあります。ただ、メリットは大きいと思いますね。

(高橋) 中核市の連絡組織はあるのですか。

(市長) 中核市市長会という組織があって、そこでいろいろなテーマを出し合って、協議します。例えば平成28年は、国の補助金が予定していたものと違って、突然ぱったり削られたときがありました。学校のトイレ改修なども、予算がいきなりつかなかったときがありました。中核市市長会の場で、船橋市も提案しましたが、各市の共通課題ですので、文科省に要請に行きました。その結果、補正予算で措置していただいたことがあります。

(高橋) 先ほど、中核市の中で船橋市は人口が多いというお話がありましたけれども、次の目標として、政令指定都市は目指しているのでしょうか。

(市長) 前任の藤代市長の時代に、近隣の市川市、船橋市などいくつかの市が集まって、そのあり方を検討した時期がありました。ただ、例え

ば公共料金を一つ合わせるにしてもむずかしいことは多いのです。人口要件からいきますと、法的には人口50万人以上ですけれど、国が示しているのは70万人です。今、船橋の人口は63万人ですが、70万人まで人口を増やしたときに船橋の都市デザインとして、そこまで住宅地を広げていいのかというようなこともあり、微妙なところなのです。

今、政令指定都市の移行に労力を費やすよりは、中核市の中でとりあえずはもっとブラッシュアップして力をつけていったほうがいいのではないかと、と思っています。人口を増やす手っ取り早い手段として、近隣市との合併があります。しかし、合併については先ほどお話したように、様々な市民サービスの違いを整理しなければなりません、そこに割かなければいけない労力が大き過ぎるのではないかと感じています。

(椎名) 市民サービスはそれぞれの市で積み上げてきたものですし、住民には郷土愛もあります。私は、市川市職員でしたから、先ほどの合併のお話を聞いていて、船橋市と市川市は、お互いに協力し合って地域を伸ばしていくほうがいいと思います。

(市長) 文化もそれぞれにありますからね。船橋には、「三山の七年祭り」という、三山地区で七年に1回のお祭りが 있습니다。昔のお祭りは、姻戚関係でつながっていて、そのお祭りの中で行き来しています。地域ごとに文化圏みたいなもの



インタビューでは様々な課題について触れられた

がいろいろあります。人口のボリュームを得るために合併することが、市民にとって幸せかどうかということも考えなくてはなりません。

（椎名）市としては、人口70万人弱ぐらいが、行政サービスを提供するにしても一番いいかなと思います。そうは言いましても、東京から20キロ圏内ですと、若い人たちが働く環境を考えたときに、民間企業がほうっておかないと思います。人口が増える要素はまだあると思いますが。

（市長）確かにあると思います。政令指定都市の権能を持つということは、これからの地方自治を進めていくうえでは、かなり有効だと思います。今、政令指定都市でも人口が減ってきているところがあります。「政令指定都市より人口の大きな中核市が誕生するのではないか」と新聞で報道されていましたけれども、それはまさしく船橋のことだったのです。

もう今、人口70万人を下回ってきている政令指定都市があります。そうしますと船橋市の人口がこれから緩やかに伸びて行ったときに、逆転してしまう可能性があります。もしそのような状況が見えてきたときに、また国とのやり取りが始まることも考えられます。今の段階では、船橋市はある程度のボリュームを備えた顔の見えるまちをめざして、中核市としての力をつけていくことが課題だと思います。

■高齢化対策と待機児童

（高橋）少子高齢化について、先ほど総括的な話もございました。高齢化対策としての地域包括ケアシステムの構築や少子化対策としての待機児童の解消策について、お尋ねします。

（市長）まず地域包括ケアシステムの構築については、各市において、まちの特色・特徴を見ながら進めていると思います。船橋市は、五つの目標を掲げています。まずは健康であることと、住まいのことです。住まいのことは、私があるシンポジウムで発表しましたら、ほかの自治体から、「えっ？」という意外な感じの反応が帰ってきました。今、住んでいるところに「住み続けた

い」という高齢者の方がたくさんいらっしゃると思いますが、でもバリアフリーになっていなくて住み続けるのが大変だというケースが多々あります。このような状況にどう対応していくかということがあり、健康寿命を延ばすこととあわせて、住まいのことを掲げました。あとは医療、介護、生活支援という、この五つの柱です。

例えば健康寿命を延ばすことについては、すでに様々な取り組みをしていただいている団体もあります。それらの団体のサポートも行いながら、シルバーリハビリ体操というのを始めました。これは茨城県で、介護認定率を下げた実績のある体操です。市民の皆さんに、講師になってもらい、各地域で教えてもらっています。講師の養成と、体操教室を同時並行で行っており、参加していただいている方も多くなっています。ほかに、生きがいづくりの事業等を各種実施しています。

住まいのことについては、千葉県で初めて居住支援協議会を立ち上げ、不動産業者の方等に入ってもらって事業を進めています。平成29年度からは社会福祉協議会に事務委託しました。高齢で身寄りがいないとか、親戚とも疎遠になってしまい、保証人が見つからないというような人たちの相談に対して、情報を提供したり、今の住んでいるところをどう活用するか等について住まいのサポートができるようにしました。

もう一つは、少し自慢になりますが、介護や医療とのかかわりについてです。船橋の歴史の中で、医師会と行政は長い間タイアップしていろいろなことを行ってきました。市の医療センターもそうですが、日本で初めてのシステムを採用したことにより、救命率がたいへん高いのです。独自のドクターカーシステムというのを行っています。24時間対応で、連絡を受けた段階で医者が同乗したドクターカーで、心肺停止状態のところに駆けつけます。すごく救命率、社会復帰する率が高いです。リハビリテーション病院も、医師会と協議をしながらつくってきました。

地域包括ケアシステムの核となる在宅医療の充実と医療・介護の連携を推進するために、船橋市

医師会の会長に代表となっただき、「船橋在宅医療ひまわりネットワーク」という協議会をつくっています。多職種間での顔の見える連携づくり、人材の育成、在宅医療提供時における支援体制の検討等の活動を行っています。ですから、認知症の支援について、平成29年からは初期集中支援チームをつくって、最初に相談に来た時点から医師もかかわっていただいています。病院に行く前に家庭でどのようなサポートをしたほうがいいのか等、相談に来てもらったときに医師がかかわれるようになっていきますので、かなりいい形で具体的なサポートを提供できるようになってきたと思っています。

ただ人材の確保は当然必要ですので、平成29年度から外国人の介護スタッフを受け入れるための研修費用等について、市が独自にバックアップして、介護施設が利用できるようにしています。

今後の高齢者人口のボリュームを考えますと、やはり健康寿命をとにかく伸ばしていただくことが肝要です。少し細かな話になりますが、市内にあるバス停の可能なところには、必ず屋根とベンチを設置する取り組みを進めています。真夏のカンカン照りの所に立ってられませんので、外出支援のために設けています。公園の一面を使った健康づくりとか、細かなものでも、できることはどんどん進めていこうと考えています。

それから待機児童対策です。平成27年4月の時点で、船橋市が国基準で625人の待機児童が発生してしまって、全国ワースト2になりました。市議会からもたくさんの御指摘いただきました。その要因としては、施設及び保育士が不足していることがあげられます。様々な詳細な分析を行い、「緊急アクションプラン」というものを、平成27年度と28年度の2か年で実施しました。

例えば、保育士の給与面について、昨年、ようやく県が保育士処遇改善事業を実施しましたが、船橋市内の私立保育園、認定こども園、小規模保育事業所に勤務した場合、独自に給与の上乗せとして月額32,110円、期末手当71,460円、合計年額456,780円を支給します。同様に勤務する保育士

のためにアパート等の宿舍を借り上げた場合に、一戸あたり月額82,000円まで補助しています。将来、市内の保育園等に保育士として勤務する意思のある方には、月3万円の就学資金を貸し付けます。卒業後に船橋市内の保育園等で修学期間以上勤務していただくと、貸付金の返還が全額免除されます。

2年間で2,300人強の定員増を行った結果、国基準でいいますと、87人に待機児童数を減らすことができました。ただし、市基準で見積もりますと、まだ300人を超える待機児童がいますので、引き続き対策を継続していく必要があります。

平成29年6月に閣議決定された「子育て安心プラン」では、「平成34年には8割の女性が就業するだろう」という仮定の数字が示されましたので、そのことを意識して対応していかなければいけないと思っています。

(高橋) 待機児童数の算定にあたって、国と市の基準というのは、どう違うのですか。

(市長) 船橋市基準の待機児童数というのは、保育園・認定こども園・家庭的保育・小規模保育の利用を申込まれた方のうち、転園を希望する利用者や一定の基準を満たした認可外保育施設、いわゆる「認証保育所」の利用者を除いた数です。一方、国基準の待機児童数は、船橋市基準の待機児童から、さらに育児休業中の場合や近くに利用可能な保育所等があるのに特定の保育所等のみを希望している場合などを除いた数となっています。

わかりやすく言いますと、「自分はここの保育所しか希望しません」という場合や利用者が育児休業を取得しているケース等は、国基準では待機児童にカウントされません。かなり狭い範囲をカウントしていますので、よく新聞等で実質的な待機児童数はもっと多いのではないかと指摘されます。

例えば、船橋駅周辺に住んでいて、「津田沼の保育所に空きがありますから、そちらを利用してください」とお話しても、なかなか通うのはたいへんです。しかし、利用者に勧めたけれども断られたということになり、国基準ではそれを待機児童とはみなしません。でも、実際に働いている人

たちの感覚からしたら、「自分の家から通勤経路の途中にある保育所に入れたい」という希望が強いです。そのような違いがありますね。

（高橋）女性の就労という目線も含めて、働く感覚で基準を作ったということですね。

（市長）そうです。国の待機児童の考え方というのは、かなり狭めてカウントしているということになります。

■待機児童だけでなく学校環境の整備が子育て支援

（市長）少し補足させていただきます。待機児童対策は、確かに大事です。船橋市は放課後ルームも市独自でずっと行ってきています。公設公営で運営してきましたけれども、そこも今、かなり待機児童が出ています。多くの皆さんは、子どもが小学校に上がるまでのことについてはいろいろ指摘をされます。しかし、子育てというのは、中学校・高校まで続きます。ですから、本来的な意味での子育て支援ということを考えますと、待機児童の問題だけではなく、学校の中の過ごしやすさを考慮するなどの学校環境の整備を取り組んでいくことが大切だと考えています。また、私がどうしても実現しなければいけないと思っているのは、独自の児童相談所をつくることです。様々なケースの子どもたちがいますが、それぞれが可能性を持っています。その子どもたちの可能性を絶対につぶさないように育て上げることをトータルで考えないといけません。「待機児童だけゼロになったから幸せか？」といいますと、そんなことはありません。これらの点については、もっと着目されてしかるべきと思っています。

（椎名）先ほど待機児童数の増加の一因として、保育士の不足があげられていました。保育士だけでなく、これから船橋市の行政全般を担っていく人材の確保という観点から、将来的にどのような構想をお考えでしょうか。

（市長）今、おかげさまで船橋市は、まだ職員採用試験に多数の応募がありますが、この問題は取り扱いのむずかしい側面があります。一時期、

「船橋市職員の給与は日本一だ」というような話しをされたことがありました。実態はそのようなことはないのです。瞬間的なデータを取りあげただけのことだったのですが、そのような感覚で見ている市民の方もたくさんいました。

公務員給与については、市民感覚のどこに合わせるのがいいのかというのは簡単に結論の出る問題ではないと思います。ただ私としては、良い人材を確保する上では、一定の給与を確保すべきだと考えています。それから、船橋で勤めることがおもしろそうだと思うてもらえることが非常に大きいと思います。ですから、「船橋って何か最近話題だし、これからいろいろやってきそうだよな。就職したら自分たちの考えていることが、何か実現できる要素があるかもしれない」というような、わくわく感のあるまちであり続けることも、非常に大事だと思います。

■住まいに注目している

（佐藤）先ほど「健康、住まい、医療、介護、生活支援」という地域包括ケアシステムを構築するにあたって五つの目標のお話がありました。その中で市長が強調されていた住まい・居住支援については、私も重要だと感じております。国は「働き方改革」を掲げて、長時間労働の是正や雇用の安定等に取り組んでいますが、本来的にはそれらとあわせて住まいの支援策にもっと力を割くべきだと思います。日本の経済や人口が右肩上がりに伸びているときに現役で働いていた多くの方は、自分の家を持っていたけれども、これからの時代はなかなか自分の家を持てる方は少なくなってくると思います。

（市長）現在、高齢化している皆さんは、持ち家の人が多いのですけれども、これからは賃貸住宅にずっと住み続ける方も当然ふえると思います。今、何が起きているかといいますと、親戚関係からも疎遠になっていて単身で暮らしている方は、住み替えようと思ってもできません。そのような場合に不動産関係者の情報によって、例えば、「この物件なら、保証人についても、居住

支援のほうでいろいろ確認しながらやれるから、入居できますよ」というようなサポートができています。

今、空き家がふえているのですけれども、空き家をどう活用していくか、トータルに考えていく必要があります。そのような意味では、様々な分野の人にかかわってもらって、高齢者の皆さんの住まいについて、どれがベストなのか、人によってベストなものが違うと思いますので、その人にとってのベストなものをじっくりお世話ができるような対応が必要だと思っています。

(佐藤) 船橋市だけではありませんが、人口・世帯が減少しているにもかかわらず、駅の近くに新築マンションが建ち続けています。その周辺の住んでいた戸建ての高齢世帯が新築マンションに移り住む例も見られるように、新築マンションが建てば、空き家が増えることになると思われます。この空き家の問題は、今どこの都市でも深刻な問題となりつつあります。空き家の活用という点で、取り組んでいることがあれば教えてください。

(市長) 空き家も二通りあります。本当に荒れて住めなくなっている空き家と、まだ十分住めるのだけれどだれも住んでいないという空き家です。船橋には、「住めるけれども、持ち主が亡くなってしまい、そのお子さんも都内で暮らしている」というような、とりあえずはそのままにしているという空き家も結構あります。そのような空き家の利活用については、地域の中のコミュニティの場として利用しているところもあります。今、市として空き家対策協議会の中でいろいろ協議をしています。何らかの形で船橋の方向性、船橋モデルみたいなものを出していけるといいなと思っています。また、宅地建物取引業者、居住支援団体、行政、大学の先生も入って、船橋市居住支援協議会、通称「住まいるサポート」という団体を立ち上げ、高齢者等の皆さんが円滑に賃貸住宅に入居できるよう支援するため、船橋市社会福祉協議会が事務局となって、相談業務をはじめました。

市の社会福祉協議会の下には、地区社会福祉協議会が24あります。その人たちが、日常の「デイサービス」や「いきいきサロン」という場における、

地域のお年寄りを見守る核になっています。社会福祉協議会がそのような相談を受けることによって、住まいのことも含めて、予防・生活支援・介護・医療の連携などのトータルのケアができると 생각합니다。

■「人をつなぐことを一番大事にしている」

(市長) 最後に、一点だけよろしいですか。船橋市は今、人口63万人を超えました。私が一番大事にしていることは、人をつなぐことです。これから20年ほど先のまちづくりを考えますと、行政課題としていろいろな整備は当然進めていきますが、いろいろな知恵を結集することが今以上に求められるのではないかと思います。

先ほど経済ミーティングの話をしました。経済ミーティングだけではなく、様々な分野の人をつなぐ取り組みをはじめています。例えば漁師の皆さんと福祉に携わっている人たちをつなぐとか、そういう出会いの場をつくらうとしています。別に福祉のテーマでつながりをつくる必要もなく、音楽関連でもかまいませんが、いろいろな人たちに参加していただき、友達になってもらいます。その友達になった人たちに、今までと全く切り口の違う様々な意見を持ち寄っていただき、行政課題の議論・検討の場に参加していただきたいと考えています。

人口が増えれば増えるほど、そして高齢化が進めば進むほど、次の世代の人たちをいかにつないでいくかということが重要になってくると思います。63万人の都市で中年から若い人たちが道を歩いていて、みんなが「ああ、どうも」と言いながら歩けるまちになったら、こんなに強いことはありません。そのことが、船橋市の行政を運営するうえで、私が一番大事にしたいと考えているところです。

(高橋) 本当に長時間、ありがとうございました。

(このインタビュー記事は事務局の責任でまとめたものです。)